2024.4.20　4月例会報告

千葉県北西部の日蓮宗系庚申塔

蕨 由美

八千代市郷土歴史研究会では、一昨年からの市内北西部の佐山・真木野に続き、今年度は小池地区の調査を行っているが、24 基の庚申塔が並ぶ小池の庚申塔群は、貴重な歴史民俗遺産であり、この小池の庚申塔群の宗教的・歴史的・地理的な価値を把握、理解するため、千葉県内の庚申塔、特に日蓮宗系庚申塔に関する論説とデータを調べ、さらに船橋市など市外に範囲を広げて、実地調査を試みている。

千葉県北西部における近世庚申塔は、千葉・埼玉・東京が境を接する江戸川流域が発祥地で、近接した松戸・市川市域で成立し、東方へ広がっていったと推定できる。

この松戸・市川地域は中世以来の有力な日蓮宗の古刹も多く、これらの寺院の影響下の村落から、題目（「南無妙法蓮華経」・「妙法」）銘や「帝釈天」銘の庚申塔が普及して、旧中山法華経寺領で千部講を組織する船橋市・八千代市域の村々に及び、近現代まで、数多くの日蓮宗系庚申塔が造立されていった。

その数は、八千代市の日蓮宗地域で 118 基、うち 64 基が日蓮宗系庚申塔である。船橋市の同地域では 72 基、うち 61 基が日蓮宗系庚申塔である。

延宝 4 年（1676）銘
釈迦如来像庚申塔
船橋市大神保町 路傍

これらの地域の日蓮宗系庚申塔の初期の形態は、釈迦如来像に「妙法」などの題目を刻んだ笠付型、題目または「帝釈天（釋提桓因天）」銘の三猿付板碑型・笠付型で、明暦～天和（1656-83）期では主流であった。なお、この時期の一般の庚申塔も、諸如来・菩薩像塔、または三猿付板碑型、同笠付型などであった。

一般の庚申塔に青面金剛像が現れるのは、当地域では延宝（1673～）期からである。

日蓮宗系庚申塔はやや遅れて、八千代市小池の元禄 5 年（1692）から盛んに建立され、船橋市藤原町の安永 7 年（1778）まで続く。

元禄 5 年（1692）銘
八千代市小池庚申塚
千葉県最古の日蓮宗系の
青面金剛像庚申塔

元禄 11 年（1698）銘
船橋市前貝塚町神明神社
「奉信教帝釋天王一結之
衆中願成辨」銘

天明（1781～）期から、一般の青面金剛像塔が一斉に「青面金剛」銘、さらに「庚申（塔）」銘の文字塔へと変わっていくが、機を同じくして、日蓮宗系庚申塔も文字塔に変わる。

安永 7 年（1778）の庚申の日に、柴又の題経寺で「帝釈天」板本尊が発見され「帝釈天」ブームが興ると、「大帝釈天王」銘の文字塔が最盛期となるが、像塔から文字塔へ変わっていく時期のため、その題経寺式の「帝釈天」像を刻んだ庚申塔は松戸市紙敷の嘉永 5 年(1852)塔のみである。なお、題経寺式以前の帝釈天像塔としては、船橋市前貝塚町の元禄 6 年塔があるが、庚申講との関連は不明である。

江戸後期以降も船橋・八千代市の日蓮宗地域では、「大帝釈天王」または「庚申塔」銘の庚申塔造立が続けられ、現代に及ぶ。